OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アショー・チン語における放置態標識 -tò/-tàʊʔ
Author(s)	大塚, 行誠
Citation	人文学林. 2025, 2, p. 55-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100779
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アショー・チン語における放置態標識 *-tò/-tàʊʔ*

大 塚 行 誠

Relinquitive Marker *-tò/-tàʊʔ* in Asho Chin

OTSUKA Kosei

Abstract

This paper investigates the relinquitive marker *-tò/-tàʊʔ* in Asho Chin (ISO 639-3: csh), a Tibeto-Burman language spoken in western and central Myanmar. Derived from the verb meaning "to put," *-tò/-tàʊʔ* indicates that the subject leaves behind an object during an action. Through a detailed analysis of applicative constructions, this study clarifies the morphosyntactic features of the relinquitive marker and demonstrates that, while typologically rare, this phenomenon is relatively common in Kuki-Chin languages. These findings provide significant insights into transitivity processes and voice systems in the languages of the region.

キーワード：チベット・ビルマ語派，適用態，充当態，放置態，他動詞化

1. はじめに

1.1. 言語の概要

アショー・チン語（Asho Chin, ISO 639-3:csh）は，チベット・ビルマ語派チン語支における周辺語群（Peripheral Kuki-Chin）の南部周辺諸語（South Peripheral Kuki-Chin）に属する言語である（西田 1989; VanBik 2009; Peterson 2017b）。この言語は，主にミャンマー西部のラカイン州（Rakhine State），マグウェ地方域（Magway Region），バゴー地方域（Bago Region），エーヤワディ地方域（Ayeyarwady Region）で話されており，話者数は約174,000人に達すると推定されている（Eberhard, Simons and Fennig 2022: 282）。

アショー・チン語には，「コウントゥー（*kòŋtú*）」と呼ばれる丘陵方言（Hill Asho）と「オウットゥー（*ɔ́ʔtú*）」と呼ばれる平地方言（Plains Asho）の2種類の方言が存在する[1)]。このうち，丘

1）Condict（1952）は，前者を北部方言（northern dialect），後者を南部方言（southern dialect）と呼ぶ一方，Stern（1962）は，前者を西部方言（western dialect），後者を東部方言（eastern dialect）と呼ぶなど，先行研究において方言名は一致

陵方言は北部の山岳地帯で使われており，Tignor（2018）によってその音韻に関する調査と詳細な記述が行われた。丘陵方言は平地方言に比べて保守的である一方，平地方言は，長期間にわたるビルマ語との接触により，音韻，文法，語彙のさまざまな側面でビルマ語からの影響が見られる（Stern 1962; Tignor 2018; Otsuka 2023）。本論文における研究対象は，アショー・チン語の平地方言である。

アショー・チン語に関する報告は，Fryer（1875），Houghton（1892, 1895），Grierson（1904），Joorman（1906）などによって行われている。しかしその後，大塚（2014）や Otsuka（2015）による人称標識に関する研究が発表されるまで，大きな進展は見られなかった（Tignor 2018: 21）。また，本論文の主題である放置態の存在についても，筆者の知る限り，アショー・チン語に関する先行研究では指摘されてこなかった。

1.2. 調査方法

筆者は，2024年2月中旬にミャンマーを訪問し，ヤンゴン市のインセイン（Insein）郡区にてアショー・チン語の平地方言に関する聞き取り調査を行った。調査協力者は，ヤンゴン市出身のアショー・チン語話者 *shǎlàı cɔ́ thwè*（Hercule）氏である（以下，SKH氏と呼ぶ）。SKH氏は1962年生まれの男性で，両親はミャンマー南西部ヤカイン州グワ市出身のアショー・チン語話者である。SKH氏は普段から親族や近所の人たちとアショー・チン語で積極的に会話しているだけでなく，長年アショー・チン民族言語文化中央委員会ヤンゴン事務局（Asho Chin National Literature and Culture Central Committee, Yangon）の主要メンバーを務め，ミャンマー各地で開かれるイベントの企画・運営やアショー・チン語の初等読本を編集する業務に携わってきた。アショー・チン語に関して豊富な知識を持つSKH氏からの全面的な協力を受け，ビルマ語を媒介言語としながら放置態標識の *-tò*/*-tàʊʔ* に関する聞き取り調査を行うことができた。

1.3. 表記方法

アショー・チン語話者のコミュニティでは，キリスト教系のポー・カレン文字を基にしたアショー・チン文字の表記法が広く用いられている（SKH氏，私信）。しかし，本論文では，言語学的な記述の正確さを期すため，以下の音素表記を用いる。

アショー・チン語の音節構造は C1（C2）（C3）V（C4）/T と表すことができる。このうち，丸括弧で囲んで示されている介子音のC2とC3，末子音のC4は非必須要素であり，/T は音節全体にかぶさる声調を表す。頭子音 C1 の位置に現れうる子音には，*/p*, *t*, *c* [tɕ], *k*, *ʔ*, *ph* [pʰ], *th* [tʰ], *ch* [tɕʰ], *kh* [kʰ], *b*, *d*, *j* [dʑ], *g*, *ɓ*, *ɗ*, *m*, *n*, *ɲ*, *ŋ*, *hm* [m̥m], *hn* [n̥n], *hɲ* [ɲ̥ɲ], *hŋ* [ŋ̥ŋ], *s*,

していない。本論文では，Tignor（2018）および Eberhard, Simons and Fennig（2022）の記述に従い，アショー・チン語の二大方言を「丘陵方言」および「平地方言」と呼ぶことにする。なお，VanBik（2009: 37–38）は，アショー・チン語話者からの私信を基に，相互理解が可能な6つの方言（Settu, Laitu, Awttu, Kowntu, Kaitu, Lauku）の存在も指摘している。しかし，現時点ではその詳細について確認できていない。

ɕ, *h*, *sh* [sʰ], *z*, *ɦ*, *l*, *hl* [l̥l], *w*, *r* [ɹ], *y* [j] /，介子音の位置に現れる子音には */l, y* [j], *w*/ がある。末子音 C4 の位置に現れうる子音音素には */ʔ*/ と */ŋ*/ の2種類がある。母音 V として現れうる音素には，単独母音の */i, ɪ, e* [e~eɪ], *ɛ, a, ə* [ə~əʊ], *ɔ, o* [o~oʊ], *ʊ, u*/ のほかに，二重母音の */aɪ*/ と */aʊ*/ がある。また，声調を伴わない軽声音節では極めて短い母音 */ă* [ă] / が現れる。

主たる声調は高声調と低声調であり，前者を揚音符号の / ˊ /，後者を抑音符号の / ˋ / で表す。ただし，一部の語や句においては下降調も見られ，本論文ではサーカムフレックスの / ˆ / を使って下降調を表す。また，声調を伴わずに，軽く発音される音節として軽声音節 */-ă*/ もあるが，語末に出現することは無い。次章以降は，便宜上，音素表記であることを表す為のスラッシュ（ / ）を省略する。

2. 本論文に関わる文法事項

2.1. 文法関係

アショー・チン語の無標の基本語順は，自動詞節ではSV（例（1），(2）参照），他動詞節ではAOV（例（3）–（6）参照）となる。ただし，述語が文末に位置するという文法的制約は比較的強いものの，述語以外の構成要素の順序にはある程度の自由度がある。述語動詞は *-ə́ʔ/-əʔ* [2]（現実法）や *-áɪ/-àɪ*（非現実法）といったモダリティ標識を必須要素として付加する点で名詞とは異なる形態統語的特徴を持つ。

アショー・チン語の人称は，自立語である人称代名詞のほか，*kă-*（1SG-）や *nă-*（2SG-），*ʔă-*（3SG-）などの人称接辞（例（2）b.，(3）–（6）参照）を用いて表すことができる[3]。三人称主語の自動詞には人称接辞が付かないが，その動詞が高声調である場合は，モダリティ標識の部分を低声調化することで三人称主語であることを明示する（例（2）a. 参照）。

アショー・チン語はその他多くのチン語支の言語と同様に，格標識において能格的な特徴を示す。一人称および二人称の人称代名詞の場合を除き，他動詞の主語にあたる名詞句の後には能格標識 *-nəʔ* を付加するのが一般的である（例（3）参照）。一方，被動者項の場合，以下の例（3）から（5）に示す通り，名詞句の後に何の格標識も付けないか，例（5）のように目的格標識の *-à/-á* を付加して目的語であることを示す[4]。受領者の項の場合も，例（6）のように目的格標識の *-à/-á* を名詞句の後に付加する。なお，被動者項には焦点を表す *-gòʔ* などの語用論的な標

2）母音始まりの接尾辞に先行する音節が開音節の場合は *-ɦ-*，声門閉鎖音を末子音とする閉音節の場合は *-k-*（中動態接辞 *-é* の場合は *-ʔ-*），軟口蓋鼻音を末子音とする閉音節の場合は *-ŋ-* の音挿入（epenthesis）が直前の音節と母音始まりの接尾辞の間で生じる。

3）一部の動詞語幹では主語の人称が制限される場合がある。例えば，平叙文の述語において，動詞語幹の *síʔ*「行く」と *ʔíʔ*「寝る」はどちらも人称の制限が無いが，もう一方の語幹形式である *sí*「行く」と *ʔí*「寝る」は，主語が一人称または二人称の場合のみに用いることができる。この動詞語幹の交替については §2.2 でも簡潔に述べる。

4）接続助詞 *-à/-á*，目的格および場所格の標識 *-à/-á* と共格の標識 *-ə̀/-ə́* は，先行する音節が低声調の場合には高声調，高声調の場合には低平調で通常現れる。

識が付くことがある（例 (4), (6) 参照)。

(1) *shălàı-já* *sɔ̀ŋ-ŋ-áʔ-mà.*
HON-PN run-EP-REAL-Q
「サライ・ジャーは走りましたか？」

(2) a. *shălàı-já* *zɔ̀ŋ-hɔ́ŋ-bɔ̀* *kwáı-ɦ-àʔ.*
HON-PN mountain-above-ALL climb-EP-3.REAL
「サライ・ジャーは山の上に登りました。」
b. *cè* *zɔ̀ŋ-hɔ́ŋ-bɔ̀* *kă-kwáı-ɦ-áʔ.*
1SG mountain-above-ALL 1SG-climb-EP-REAL
「私は山の上に登りました。」

(3) *shălàı-já-nàʔ* *ɓɔ́* *ʔă-ʔé-ɦ-áʔ.*
HON-PN-ERG meal 3SG-eat-EP-REAL
「サライ・ジャーは，ご飯を食べました。」

(4) *sălàı-já-nàʔ* *wóʔ(-gɔ̀ʔ)* *ʔă-tɔ́ʔ-k-áʔ.*
HON-PN-ERG pig-PR 3SG-kill-EP-REAL
「サライ・ジャーは，豚を殺しました。」

(5) *sălàı-já-nàʔ* *wóʔ(-k-à)* *ʔă-tɔ́ʔ-k-áʔ.*
HON-PN-ERG pig-EP-OBJ 3SG-kill-EP-REAL
「サライ・ジャーは，豚を殺しました。」

(6) *yàʔ-nàʔ* *pălá-ɦ-à* *ní* *sóʔúʔ(-gɔ̀ʔ)* *ʔă-pàıʔ-k-áʔ.*
3SG-ERG PN-EP-OBJ DEM book（-PR） 3SG-give-EP-REAL
「彼は，パラーにこの本をあげました。」

他動詞節において，被動者または受領者の項に発話行為の参与者（speech-act participant）が含まれる場合，すなわち一人称または二人称を表す名詞句が目的語となっている場合，その述語動詞の前には逆行態標識（inverse marker）の接頭辞 *mă-*（大塚（2014）参照）を付加する（例 (7) – (9) 参照)。接頭辞 *mă-* を動詞に付加する際，その直後の音節では高声調化（例 (7) – (9) 参照）や初頭子音の有声化（例 (9) 参照）が起こる。

(7) *shălàɪ-já-nàʔ* *cămè-ɦ-á* *mă-shɔ́ʔ-k-ɔ́ʔ.*
HON-PN-ERG 1PL-EP-OBJ INV-INV.look-EP-REAL
「サライ・ジャーは私たちを見ました。」(cf. *shɔ̀ʔ* 動詞「見る」の原形)

(8) *shălàɪ-já-nàʔ* *nàʊŋmè-ɦ-á* *mă-dâɪŋ-ŋ-áɪ.*
HON-PN-ERG 2PL-EP-OBJ INV-INV.beat-EP-IRR
「サライ・ジャーはあなたたちを打つでしょう。」(cf. *dâɪŋ* 動詞「打つ」の原形)

(9) *láʔshóŋ* *kă-mă-pǎɪʔ-k-áɪ.*
gift 1SG-INV-INV.give-EP-IRR
「私はあなたにプレゼントをあげます。」(cf. *pàɪʔ* 動詞「与える」の原形)

2.2. 動詞における語幹形式の交替

チン語支の多くの言語で，1つの語根に対して2つの語幹形式を持つ動詞が見られる（Hillard 1974; 西田 1989; VanBik 2009)。2つの語幹形式を持つ動詞の割合は言語によって異なっており，チン語支の中央語群（Central Kuki-Chin）に属するハカ・ライ語では多くの動詞が2つの語幹形式を持っているのに対し，チン語支の周辺語群（Peripheral Kuki-Chin）に属するダーイ・チン語では，2つの語幹形式を持つ動詞は全体の約20%にとどまる（So-Hartmann 2009: 97)。また，語幹形式の交替に関する機能や使い分けは言語ごとに大きく異なっており，形態・統語的条件に加え，語用的な要因が関与することもあるため，その機能を包括的かつ統一的に示すことは現調査段階では困難である。2つの語幹形式の名称は言語によって異なるが，ティディム・チン語（Henderson 1965）やハカ・ライ語（Peterson 2017a)，ミゾ語（Chhangte 1993）など，多くのチン語支諸言語では「語幹形式Ⅰ」「語幹形式Ⅱ」として記述されることが多い。

アショー・チン語においても，一部の動詞で語幹形式の交替が確認される。例えば，*ʔí/ʔíʔ*「寝る」(cf. PKC *ʔip-I, *ʔiʔ-II “SLEEP”)，*ká/káʔ*「泣く」(cf. PKC *krap-I, *kraʔ-II “CRY”)，*sí/síʔ*「行く」，*shɔ̀ʔ/shɔ̂*「見る」(cf. See *‘sawk ‘*look.I*’’* and *‘só* “look.II” in VanBik (2009: 10–11))，*klò/klòʔ*「横たわる」(cf. PKC *kluu-I, *kluuk-II “FALL OVER”)，*khlò/khlòʔ*「倒す」(cf. PKC *khluu-I, *khluuk-II “FELL”)，*ʔò/ʔòʔ*「飲 む」，*myò/myòʔ*「盗 む」，*nò/nàʊʔ*「言 う」，*yò/yàʊʔ*「聞く」，*yòsò/yàʊʔsóʔ*「理解する」，*klò/klàʊʔ*「落ちる」(cf. PKC *klaa-I, *klaak-II “FALL”)，*khlò/khlàʊʔ*「落とす」(cf. PKC *khlaa-I, *khlaak-II “DROP (v.t.)”) などの動詞で語幹形式の交替が見られる。

しかし，動詞語幹の各形式の機能や二つの動詞語幹の具体的な使い分けについては，現在も調査・分析を進めており，紙幅の都合上，ここで詳述することは控える。また，動詞語幹の交替は本論文の主題から外れるため，詳細には立ち入らないが，「置く」を意味するアショー・チ

ン語の本動詞 *tò/tàʊʔ* が文法化して放置態標識となった後も，動詞形態素としての二つの語幹形式が保持されており，*-tò* と *-tàʊʔ* のいずれも放置態標識として用いられていることをここに付記しておく。

2.3. 継続アスペクト標識としての *-tò/-tàʊʔ*

§1.1 でも述べたように，アショー・チン語の平地方言は，長期間にわたるビルマ語との接触により，ビルマ語からの影響を受けている。ビルマ語の形態素 *thá* は，本動詞としては「置く」という意味を持つが，以下の例（10）に示した通り，助動詞として用いる場合には「〜しておく」や「〜してある」という意味で結果状態の継続を表す（加藤 2019: 161）。

（10） *myămà=lò* *yé=thá=dɛ̀.* ［ビルマ語］
Burmese=as write=put=REAL （加藤 2019: 161）
「ビルマ語で書いてあります。」

本行（2014）によると，ビルマ語における助動詞の *=thá* は，動作や出来事が完了し，その結果が現在などの基準となる時点まで続いている状態を表す。特に意図的な他動詞や動態動詞と共起しやすく，動作が終了した後，その影響が基準時点まで持続している場合に用いられる。このようなアスペクト標識はアショー・チン語にも見られる。アショー・チン語の動詞 *tò/tàʊʔ* は「置く」という意味を持つが，本動詞の後に助動詞として現れると，以下の例（11）と（13）に示した通り，動作の結果状態の継続を表す。両言語の類似性を示すため，例（11）に対応するビルマ語の例を（12）に，例（13）に対応するビルマ語の例を（14）に提示する。

（11） a. *sʊ́-tàʊʔ-dìʔ* *hèŋ*
collect-put-AN money
「貯めておいた金」
b. *sʊ́-tò-dìʔ* *hèŋ*
collect-put-AN money
「同上」

（12） *sû=thá=dɛ̂* *ŋwè* ［ビルマ語］
collect=put=AN money （大野 2000: 279 の例文を一部改変）
「貯めておいたおいた金」

（13） a. *ʔáŋkhwáʔ-dʊ̌ʔ-k-à* *tò-tàʊʔ-plí-hŋ-ɔ́ʔ.*
drawer-inside-EP-LOC put-put-finish-NSIT-REAL
「引き出しの中に置いておきました。」
b. *ʔáŋkhwáʔ-dʊ̌ʔ-k-à* *tàʊʔ-tàʊʔ-plí-hŋ-ɔ́ʔ.*
drawer-inside-EP-LOC put-put-finish-NSIT-REAL
「同上」

（14） *ʔànzwé-dɛ́=hmà* *thá=thá=pí=bì.* ［ビルマ語］
drawer-inside=at put=put=finish=NSIT （Okell 1969: 309 のグロスと表記を改変）
「引き出しの中に置いておきました。」

以上，アショー・チン語の動詞 *tò/tàʊʔ* は，「置く」という意味の本動詞としてだけでなく，ビルマ語の動詞 *thá*「置く」のように継続アスペクトを示す助動詞としても機能することを述べてきた。第3章では，この「置く」という意味を持つ動詞に由来する形態素 *-tò/-tàʊʔ* が，適用態の一種である放置態を示す標識としても用いられていることを指摘する。放置態は，チン語支のいくつかの言語に見られる文法現象であり，ビルマ語には存在しないようである。次の §2.4 では適用態の定義を示し，続く §2.5 ではチン語支の諸言語に見られる放置態の適用構文を紹介する。第3章の考察では，アショー・チン語の「置く」という動詞に由来する *-tò/-tàʊʔ* が放置態標識として形態統語的にどのように機能しているかについて，具体例を交えながら詳述する。

2.4. 適用態（applicative voice）

適用態は，本来は動詞の必須項ではない斜格語を目的語という文法関係に対応付ける態である（古賀 2015: 18）。適用構文（applicative construction）とは，動詞に生産的な派生接辞を付加することによって，通常ならば周辺的な補語として表示される受益者項，道具項，場所のような周辺的な項を主要な文法的役割を担う項として昇格させ，目的語などの文の核心的な項として組み込む構文である。

例えば，Shibatani（1996）は，アイヌ語には，以下の例（15）のような場所を表す文において，適用構文（例（15）a. 参照）とその代替形式としての非適用構文（例（15）b. 参照）の対があると報告している（Shibatani 1996: 159）。例（15）a. の適用構文では，動詞 *horari*「住む」の前に適用態標識の *e-* を付加することで場所を表す語 *cise*「家」が目的語に昇格している。一方，例（15）a. に対応する例（15）b. の非適用構文では，*cise*「家」に後置詞 *ta*「〜に」を付加することで，周辺的な斜格句として場所を表している。

（15） a. *Poro* *cise* *e-horari.* ［アイヌ語］
big house APPL-live （Shibatani 1996: 159）
「彼は大きな家に住んでいます。」
b. *Poro* *cise* *ta* *horari.* ［アイヌ語］
big house in live （Shibatani 1996: 159）
「彼は大きな家に住んでいます。」

Dixon and Aikhenvald（2000: 13–14）および Peterson（2007: 39）の記述に基づき，適用態は概ね次の（a）から（d）の文法的特徴を持つものと定義できる。

（a）自動詞節は，適用態を用いることで他動詞節となる。他動詞節に適用態が用いられると，他動性を保持したまま元の他動詞節とは異なる意味役割の項が目的語として加わる。
（b）適用態を用いることで，自動詞節のＳはＡに変わり，他動詞節のＡはそのまま維持される。
（c）通常は斜格で表される周辺的な項が，適用態によって目的語などの中核項に昇格する。
（d）適用構文は，動詞に接辞を付加するなどの生産的な形態操作によって形成される。

ハカ・ライ語では，例（16）a. のように，適用態標識は動詞の語幹形式Ⅱとしか共起せず，語幹形式Ⅰの動詞に適用態標識が付くことは無い。一方，例（16）a. の内容を非適用構文として言い換えた例（16）b. では，述語動詞が無標の語幹形式Ⅰで現れる。なお，適用態の下位分類である共同行為態（comitative），先行態（prioritive），道具態（instrumental）を表す適用構文は，アイヌ語の例（15）と同様，適用態によって加えられた目的語を非適用構文として斜格で表すことが可能である（Peterson 2007: 45–46）。以下の例では，（16）a. に共同行為態を表す適用構文を，例（16）b. にその内容を非適用構文で言い換えた文を示す。

（16） a. *ka-law* *ʔan-ka-thloʔ-pii.* ［ハカ・ライ語］
1SG.POSS-field 3PL.S-1SG.O-weed^{II}-COM
「彼らは私と共に私の畑の草取りをしました。」 （Peterson 2007: 45）
b. *kay-maʔ=hee* *ka-law* *ʔan-thlaw.* ［ハカ・ライ語］
1SG-PRON=COM 1SG.POSS-field 3PL.S-weed^{I}
「彼らは私と共に私の畑の草取りをしました。」 （Peterson 2007: 45）

一方，放置態（relinquitive）やその他のハカ・ライ語の適用構文では，非適用構文で言い換えることはできない（Peterson 2007: 45–46）。つまり，すべての適用構文がその代替形式として

の非適用構文を持つわけではない。アショー・チン語の放置態を表す適用構文も，非適用構文として，適用態によって加えられた目的語を，斜格句などの周辺項で表すことはできないようである。次の §2.5 では，チン語支諸言語に見られる放置態標識の機能と形式について述べる。

2.5. 放置態（relinquitive）

前節で述べたように，ハカ・ライ語には放置態（relinquitive）と呼ばれる適用態が存在する。ハカ・ライ語の放置態は，語幹形式Ⅱの動詞に接尾辞 *-taak* を付加することで示され，主語の指示対象が何らかの動作を行う際に，目的語の指示対象を離れたところに残しながら行動する，もしくは置き去りにしてから行動することを表す。

放置態は，主語の指示対象と目的語の指示対象の分離を明示的に示し，文脈に応じて「主語の指示対象が動作を行いながら目的語の指示対象を残す」という解釈や，「目的語の指示対象を残してから主語の指示対象が動作を行う」という解釈が可能である。例えば，例（17）では，動詞の語幹形式Ⅱに放置態標識としての派生接辞 *-taak* を付加することで，新たな目的語が加わり，主語の指示対象がその追加された目的語の指示対象を残して動作を行うという意味を表している。

ただし，動詞が示す主語の指示対象による行為と放置態標識 *-taak* が示す「残す」という行為の時間的順序は必ずしも連続しておらず，例（18）のように，両者の行為が同時に生じる場合もある。この解釈は，動詞の意味に大きく依存する。また，ハカ・ライ語では放置態標識 *-taak* の付加により無生物の目的語を加えることも可能とされるが，アショー・チン語の放置態にはそのような例はまだ確認されていない。

（17） *law* *ʔa-ka-thloʔ-taak.* ［ハカ・ライ語］
field 3SG.A/S-1SG.P-hoe^{II}-RELINQ
「彼は私を残して畑を耕しました。」 （Peterson 2017a: 268）

（18） *vaanlooŋzuannaakhmun* *ʔa-rak-phaak* *tik=ʔaʔ* *khan* ［ハカ・ライ語］
airport 3SG.SBJ-PERF-reach^{II} time=LOC DEIC
tsun *ʔa-vaanzuanlooŋ=niʔ* *ʔa-rak-zuan-taak-diam-tsaŋ.*
DEIC 3SG.POSS-plane=ERG 3SG.SBJ-PERF-fly^{II}-RELINQ-already-PERF
「彼が空港に着いた時には，飛行機はすでに離陸しており，
彼は取り残されてしまいました。」 （Peterson 1998: 101）

本論文では，英語の“relinquitive”に相当する文法用語を「放置態」と呼ぶ。この“relinquitive”という用語は，チン語支の研究において適用態の一種を指す語として使用されており，Peterson

（1998）がハカ・ライ語の他動詞化に関する形態統語的特徴を記述する際に初めて導入したものである（Peterson 1998: 100–101）。以降，この用語はダーイ・チン語（So-Hartmann 2009），シザン・チン語（Davis 2017），ティディム・チン語（大塚 2024）など，チン語支諸言語の文法記述において，適用態の一種として広く用いられている。

So-Hartmann（2009）によれば，アショー・チン語と同じくチン語支周辺語群の南部周辺諸語（South Peripheral Kuki-Chin）に属するダーイ・チン語には *taa:k*/*ta* という適用態標識があり，以下の例（19）のように動詞の後にその標識を置くことで目的語が新たに加わり，「〜を後に残して行う」という放置態の意味を表す。ダーイ・チン語の形態素 *taa:k*/*ta* には「置く（put）」という本動詞としての意味もあり，他の動詞形態素と同様に *taa:k* と *ta* という2つの語幹形式を持つなど，動詞としての形態的特徴も残している（Hartmann-So 2009: 199）。

（19） *Ling=noh lou: nah phyoh ta=kti.* ［ダーイ・チン語］
Ling=ERG field IO.AGR:1SG weed.A RELINQ.B=NON.FUT
「リンは私を待たずに畑の草むしりをしました。」 （So-Hartmann 2009: 199）

アショー・チン語の放置態標識である形態素 *-tò*/*-tàʊʔ* は，「置く」という本動詞としての意味を持つほか，*-tò* と *-tàʊʔ* という2つの語幹形式を持つ点で，ダーイ・チン語の適用態標識 *taa:k*/*ta* と形態的に類似している。また，アショー・チン語の *-tò* がダーイ・チン語の *ta* と，アショー・チン語の *-tàʊʔ* がダーイ・チン語の *taa:k* およびハカ・ライ語の *taak* と関連性を持つことは，VanBik（2009）によるPKCおよびハカ・ライ語との音韻対応からも確認できる。以下の例（20）から（24）に示すように，PKC やハカ・ライ語の韻が *-a* で終わる開音節は，アショー・チン語では *-o* に対応し，例（25）から（29）に示すように，PKC やハカ・ライ語において *-a(a)k* を韻に持つ閉音節は，アショー・チン語では *-aʊʔ* に対応する[5)]。

（20） PKC *paa “MUSHROOM” HL *pâa* “mushroom” AC *pò* “mushroom”
（21） PKC *phaa “ARRIVE” HL *phàa* “arrive” AC *phò* “arrive”
（22） PKC *haa “TOOTH” HL *hâa* “tooth” AC *hó* “tooth”
（23） PKC *ŋaa ≍ *hŋaa “FISH” HL *ŋàa* “fish” AC *ŋò* “fish”
（24） PKC *khlaa “MOON” HL *thlăa* “moon” AC *khló* “moon”
（25） PKC *tak “WEAVE” HL *tak* “weave” AC *táʊʔ* “weave”
（26） PKC *hlaak “LADDER” HL *hlây-hlaak* “ladder” AC *(ʔă)hlàʊʔ* “ladder”

5）PKCにおいて軟口蓋鼻音を末子音に持つ閉音節 PKC *-aŋ/*-aaŋ にも AC-*aʊŋ* との規則的な対応が見られる。その具体例としては，AC *ʔă-màʊŋ*「夢」（PKC *maŋ「夢」），AC *nàʊŋ*「あなた」（PKC *naŋ「あなた」），AC *ʔă-yàʊŋ*「陰茎」（PKC *yaŋ「陰茎」），AC *sáʊŋ*「生米」（PKC *θaaŋ「稲（田）」），AC *ʔă-háʊŋ*「汁」（PKC *haaŋ「汁」），AC *khláʊŋ*「人」（PKC *khlaaŋ ≍ *khlooŋ「人」）などが挙げられる。

（27） PKC *naak ≍ *hnaak “RIB” HL *hnaak* “rib” AC *hnáʊʔ(yó)* “rib”
（28） PKC *paa-laak “BAT” HL *pàa-laak* “bat” AC *phălàʊʔ* “bat”[6)]
（29） PKC *khlaak “DROP” HL *thlaak* “drop” AC *khlàʊʔ* “drop”

チン語支諸言語の中には，「置く」を表す動詞形態素とは異なる接辞で放置態を示すものも存在する。例えば，チン語支周辺語群の北東部諸語（Northeastern Kuki-Chin）に属するティディム・チン語では，接尾辞 *-san³*（例（30）参照）を，シザン・チン語では接尾辞 *-sân* を語幹形式Ⅱの動詞に付加することで放置態を表す（大塚 2024: 58; Davis 2017: 38）。一方，ハカ・ライ語と同じくチン語支中央語群に属するミゾ語でも，放置態標識として接尾辞の *-sàn*（例（31）参照）が用いられる。しかし，Chhangte（1993）の指摘によれば，この形式はいずれの動詞にも語源的に遡ることができず，元来の意味は不明である（Chhangte 1993: 102）。

（30） *nu¹ciŋ²=in³* *lian³* *a¹=* *ta:i³-san³* *hi:³.* ［ティディム・チン語］
PN=ERG PN 3= run^{II}-RELINQ COP^{I} （大塚 2024: 58）
「チンさんは，リアンを残して走り去りました。」

（31） *ín* *kâ-kal-sàn.* ［ミゾ語］
house 1SG-go^{II}-desert （Chhangte 1993: 102）
「私は家を（後にして）行きました。」

Peterson（2007）によれば，通言語的に見ると，適用構文を持つ言語では，受益態／被害態（benefactive/malefactive），道具態（instrumental），共同行為態（comitative）のいずれかが存在する可能性が高い。一方で，放置態やそれに類似する適用構文を持つことは稀である（Peterson 2007: 22）。放置態は通言語的には稀な適用態の一種だが，先述の通り，チン語支諸言語では一般的に見られる文法現象である。次章では，アショー・チン語における放置態の例文を通して，その形態統語的特徴を明らかにする。

3. 考察

以下の例（32）と（33）に示した通り，アショー・チン語において形態素 *tò/tàʊʔ* は「置く」という意味の本動詞として用いることができる。

6）厳密に言えば，アショー・チン語における語頭子音 *ph-* と PKC *p- は一致していない。しかし，VanBik（2009）は，PKC *paa-laak「コウモリ」を再構する為の根拠として，語頭子音 *ph-* を持つクミ語（Khumi）の *pha(ng)lá*「コウモリ」も示している（VanBik 2009: 85）。

（32） *sóʔúʔ* *ɓá* *nă-tàʊʔ-k-áʔ-mə̀.*
book where 2SG-put-EP-REAL-Q
「あなたは本をどこに置きましたか？」

（33） *nă-pùŋ-khlóŋ-ŋ-à* *tò-ɦ-é-ɦ-è.*
2SG-body-above-EP-LOC put-EP-MID-EP-IMP
「あなた自身の体の上に置きなさい。」

本動詞の後に *-tò* または *-tàʊʔ* を助動詞として付加すると，§2.3で述べたように継続アスペクト標識として機能し，「～しておく」や「～してある」という意味を表すことがある。一方，放置態標識として *-tò* または *-tàʊʔ* が用いられる場合には，新たな目的語が追加され，「～を残して～する」という意味を持つようになる。すなわち，主語の指示対象が新たに追加された目的語の指示対象を残して，本動詞が示す行為をすることを表す。

以下の例（34）は自動詞 *sɔ̀ŋ*「走る」を述語とする自動詞節であり，例（35）は放置態標識を付加することで他動詞化した節である。*-tò* または *-tàʊʔ* を付加すると，*ʔăphăwá*「夫」という放置される者の項が新たな目的語として加わり，他動詞節になる。その際，*-tò* または *-tàʊʔ* の初頭子音は，先行する音節が促音節でない限り有声化し，放置態標識が付いた自動詞は他動詞化に伴い，高声調になる（例（35）参照）。

（34） *ʔăphăyá* *sɔ̀ŋ-ŋ-áʔ.*
wife run-EP-REAL
「妻が逃げました。」

（35） a. *ʔăphăyá-nəʔ* *ʔăphăwá-ɦ-à* *ʔă-sɔ́ŋ-ʈàʊʔ-k-áʔ.*
wife-ERG husband-EP-OBJ 3SG-TRZ.run-RELINQ-EP-REAL
b. *ʔăphăyá-nəʔ* *ʔăphăwá-ɦ-à* *ʔă-sɔ́ŋ-ʈò-ɦ-áʔ.*
wife-ERG husband-EP-OBJ 3SG-TRZ.run-RELINQ-EP-REAL
「妻は夫を残して逃げました。」

例（35）の放置態標識 *-tò*/*-tàʊʔ* を用いた適用構文は，例（36）のように本動詞 *tò*/*tàʊʔ*「置く」を用いた非適用構文で言い換えることもできると調査協力者のSKH氏は指摘している。

（36） a. *ʔăphăyá-nàʔ* *ʔăphăwá-ɦ-à* *tàʊʔ-nàʔ* *sɔ̀ŋ-ŋ-áʔ.*
wife-ERG husband-EP-OBJ put-CNJ run-EP-REAL
b. *ʔăphăyá-nàʔ* *ʔăphăwá-ɦ-à* *tò-nàʔ* *sɔ̀ŋ-ŋ-áʔ.*
wife-ERG husband-EP-OBJ put-CNJ run-EP-REAL
「妻は夫を残して逃げました。」

放置態標識の *-tò* と *-tàʊʔ* は，動詞における2つの語幹形式の交替（§2.2 参照）に起因するものであり，現調査段階ではその機能に大きな違いは見られなかった。以下に示す例でも *-tò* と *-tàʊʔ* は相互に交替可能なため，本論文では便宜上，会話の中で比較的よく使われている *-tàʊʔ* を代表形として以下例示する。

例（37）は，自動詞 *bɔ́* 「帰る」を述語とする自動詞節であり，例（38）は，放置態標識 *-tàʊʔ* の付加によって一人称代名詞 *cè* 「私」が目的語として加わった他動詞節である。同様に，例（39）は，自動詞 *dŏ́* 「死ぬ」を述語とする自動詞節であり，例（40）は，放置態標識を付加することで二人称代名詞 *nàʊŋ* 「あなた」が目的語として加わった他動詞節である。

（37） *shămó* *jăpáŋ-ŋ-à* *bɔ́-síʔ-k-əʔ.*
teacher Japan-EP-LOC return-go-EP-3.REAL
「先生は日本へ帰って行きました。」

（38） *shămó-nàʔ* *cè-ɦ-á* *jăpáŋ-bɔ̀* *mă-bɔ́-ʈàʊʔ-k-áʔ.*
teacher-ERG 1SG-EP-OBJ Japan-ALL INV-return-RELINQ-EP-REAL
「先生は私を置いて日本に帰りました。」

（39） *yàʔ* *dŏ́-ɦ-àʔ.*
3SG die-EP-3.REAL
「彼は死にました。」

（40） *yàʔ-nàʔ* *nàʊŋ-ŋ-á* *mă-dŏ́-ʈàʊʔ-k-áʔ-mə̀.*
3SG-ERG 2SG-EP-OBJ INV-die-RELINQ-EP-REAL-Q
「彼はあなたを残して死んだのですね？」

§2.1で既に述べた通り，他動詞を述語に持つ節では，被動者や受領者に発話行為の参与者が含まれる場合，動詞に接頭辞 *mă-* が添加され，動詞の部分では高声調化や初頭子音の有声化が起こる。放置態の適用構文の場合も同様であり，話し手を表す名詞句（例（38）参照）や聞き

手を表す名詞句（例（40）参照）が適用態によって新たに追加される目的語である場合，述語動詞に接頭辞 *mă-* が付加される。一方，以下の例（41）と例（42）のような，例（38）と例（40）を言い換えた非適用構文においては，他動詞 *tàʊʔ*「置く」の目的語が一人称代名詞の *cè*「私」（例（41）参照）または二人称代名詞の *nàʊŋ*「あなた」（例（42）参照）であっても，接頭辞 *mă-* は義務的に付加されないようである。

（41） *shămó-nàʔ* *cè-ɦ-á* *tàʊʔ-nàʔ* *jăpáŋ-bɔ̀* *ɓɔ́-síʔ-k-àʔ.*
teacher-ERG 1SG-EP-OBJ put-CNJ Japan-ALL return-go-EP-3.REAL
「先生は私を置いて日本に帰って行きました。」

（42） *yàʔ-nàʔ* *nàʊŋ-ŋ-á* *tàʊʔ-nàʔ* *dŏ́-síʔ-k-àʔ.*
3SG-ERG 2SG-EP-OBJ put-CNJ die-go-EP-3.REAL
「彼はあなたを残して死んでしまいました。」

放置態を示す適用構文において，放置者項と被放置者項のどちらも発話行為の参与者である場合にも，以下の例（43）と例（44）のように接頭辞 *mă-* を付加しなければならない。

（43） *cămè-khwâ* *nàuŋmè-ɦ-á* *kɔ̀ŋthòŋ-ŋ-á* *mă-ʔɔ́ŋ-ʈàuʔ-k-ái.*
1PL-TOP 2PL-EP-OBJ PN-EP-LOC INV-INV.stay-RELINQ-EP-IRR
「私たちはあなたたちを置いてコントン[7]に住みます。」

（44） *nàʊŋ* *cè-ɦ-á* *mă-ʔíʔ-tàʊʔ-k-ái.*
2SG 1SG-EP-OBJ INV-sleep-RELINQ-EP-IRR
「あなたは私を残して寝るでしょう。」

放置態標識は，自動詞だけでなく他動詞にも付加されうる。例えば，以下の例（45）は他動詞 *ʔé*「食べる」を述語とする他動詞節であり，例（46）は放置態標識を付加して形成された二重他動詞節である。放置態標識 *-tàʊʔ* を付加することで，*mái-pălá*「マイ・パラー」という放置される対象が新たな目的語として加わる。この場合，例（47）のように非適用構文での言い換えも可能である。

7）ミャンマーのバゴー地方域にあるパダウン（Padaung）と呼ばれる地域のアショー・チン語名である。

（45） *shălàɪ-já-nàʔ* *ɓó* *ʔă-ʔé-ɦ-áʔ.*
HON-PN-ERG meal 3SG-eat-EP-REAL
「サライ・ジャーは，ご飯を食べました。」

（46） *shălàɪ-já-nàʔ* *máɪ-pălá-ɦ-à* *ɓó* *ʔă-ʔé-ʈàʊʔ-k-áʔ.*
HON-PN-ERG HON-PN-EP-OBJ meal 3SG-eat-RELINQ-EP-REAL
「サライ・ジャーはマイ・パラーをおいて，ご飯を食べました。」

（47） *shălàɪ-já-nàʔ* *máɪ-pălá-ɦ-à* *tàʊʔ-nàʔ* *ɓó* *ʔă-ʔé-ɦ-áʔ.*
HON-PN-ERG HON-PN-EP-OBJ put-CNJ meal 3SG-eat-EP-REAL
「サライ・ジャーはマイ・パラーをおいて，ご飯を食べました。」

他動詞節において，被動者や受領者に発話行為の参与者が含まれる場合，動詞に接頭辞 *mă-* が付加され，後続する動詞の部分では高声調化や初頭子音の有声化が生じることは既に述べた。以下の例（48）および（49）に示すように，他動詞に放置態標識が付いた形式の適用構文においても，話し手や聞き手を表す項が適用態によって新たに追加される目的語となる場合，述語動詞に接頭辞 *mă-* が付加される。

（48） *cè* *nàʊŋ-ŋ-á* *lăphâʔ-hâʊŋ* *mă-ʔóʔ-tàʊʔ-k-áʔ.*
1SG 2SG-EP-OBJ tea-liquid INV-INV.drink-RELINQ-EP-REAL
「私はあなたを置いてお茶を飲みました。」

（49） *phò-nàʔ* *cè-ɦ-á* *ʔălə* *mă-shɔ́ʔ-tàʊʔ-k-áʔ.*
3SG-ERG 1SG-EP-OBJ field INV-INV.cultivate-RELINQ-EP-REAL
「彼は私を残して畑を耕しました。」

§2.2 で述べたように，アショー・チン語の一部の動詞には2つの語幹形式が存在する。ティディム・チン語，シザン・チン語，ミゾ語，ハカ・ライ語では，放置態標識が付く動詞には必ず語幹形式IIが用いられるが，ダーイ・チン語では放置態標識が付く動詞に2つの語幹形式のいずれも使用可能であると So-Hartmann（2009）は指摘している（So-Hartmann 2009: 198–199）。アショー・チン語の場合，例（50）と（51）に示すように，放置態標識はどちらの語幹形式の動詞とも共起し，SKH氏への聞き取り調査でも両者の間に意味の違いはほとんど無いとしている。アショー・チン語における動詞の語幹形式の選択については，今後さらに多くの適用構文を調査し，分析を進めていく必要があるだろう。

（50） a. *cè* *nàʊŋ-ŋ-á* *mă-**ʔí**-ʈàʊʔ-k-áɪ.*
1SG 2SG-EP-OBJ INV-sleep-RELINQ-EP-IRR
b. *cè* *nàʊŋ-ŋ-á* *mă-**ʔíʔ**-tàʊʔ-k-áɪ.*
1SG 2SG-EP-OBJ INV-sleep-RELINQ-EP-IRR
「私はあなたを残して寝るでしょう。」

（51） a. *nàʊŋ* *cè-ɦ-á* *lăpháʔ-háʊŋ* *mă-**ʔó**-ʈàʊʔ-k-ɔ́ʔ-hníʔ.*
2SG 1SG-EP-OBJ tea-liquid INV-INV.drink-RELINQ-EP-REAL-PR
b. *nàʊŋ* *cè-ɦ-á* *lăpháʔ-háʊŋ* *mă-**ʔóʔ**-tàʊʔ-k-ɔ́ʔ-hníʔ.*
2SG 1SG-EP-OBJ tea-liquid INV-INV.drink-RELINQ-EP-REAL-PR
「あなたは私を残してお茶を飲んだのですね？」

本調査では，聞き取り調査を通じてアショー・チン語に放置態の適用構文が存在することを確認した。また，その基本的な形態統語的特徴をある程度明らかにすることができたが，具体的にどのような条件で適用構文が使用されるのかについては十分に解明できなかった。SKH氏は，例（52）のような物語文においても放置態が頻繁に用いられるとコメントしており，この使用には語用論的な要因も関与していると考えられる。今後は，聞き取り調査に加えてコーパスなども活用し，さらに分析と検討を進めていく必要があるだろう。

（52） *yóʔyóʔkàɛ̂ŋ* *nàŋ* *nàŋ-ʔɔ́ʔ-k-à* *sònáʊ* *pùŋ-thúŋ* *mwé-ɦ-ə̀ʔ-dì.*
once.upon.a.time village village-one-EP-LOC children CF-three exist-EP-3.REAL-HS
yàʔmè *ʔăŋɔ́ʔsòdăgwè* *ʔăpăʔáʊ-nəʔ* *yàʔmè-ɦ-á* *ʔă-dʊ̌-ʈàʊʔ-k-ɔ́ʔ.*
3PL younger.days father-ERG 3PL-EP-OBJ 3SG-die-RELINQ-EP-REAL
「昔々，ある村に３人の子どもがいたとさ。
彼らが若い頃に父親は彼らを残して死んでしまいました。」

4. まとめ

本論文では，アショー・チン語における放置態の適用構文に焦点を当て，その形態統語的な特徴を明らかにした。アショー・チン語には，「置く」を意味する本動詞から派生した文法標識として，継続アスペクト標識（§2.3 参照）と放置態標識の２種類が存在することを指摘した。動詞の後に放置態標識の *-tò* または *-tàʊʔ* を付加すると，新たな目的語が導入され，主語の指示対象がその目的語の指示対象を残して動作を行うことを表す。この放置態は，通言語的には稀有なヴォイス現象であり，アショー・チン語に限らず，他のチン語支諸言語にも見られるこ

とを述べた。

一方，放置態に関する聞き取り調査と考察から，いくつかの課題も浮かび上がった。例えば，ハカ・ライ語では放置態標識 *-taak* を付加することで，有生物だけでなく無生物の目的語も導入できるという報告がある（Peterson 1998: 101）。しかし，このような例は今回の調査ではアショー・チン語で確認できなかった。また，アショー・チン語の放置態標識には *-tò* と *-tàʊʔ* の2つの形式があり，一部の動詞には2つの語幹形式が見られるのだが，それらの選択基準についても明らかにすることができなかった。これらの点については，今後さらに聞き取り調査を進める必要がある。

本研究は，アショー・チン語における放置態の形態統語的特徴を明らかにしたが，適用構文を使用する場合と使用しない場合の語用論的な差異については十分な分析ができなかった。今後はコーパスなどを活用し，放置態がどのような文脈で使用される傾向があるのかを分析することで，アショー・チン語における適用構文の機能的側面をより深く理解できるだろう。

略語一覧

1: 1st person, 2: 2nd person, 3: 3rd person, ¹: tone 1 in Tiddim Chin, ²: tone 2 in Tiddim Chin, ³: tone 3 in Tiddim Chin, -: morphological boundary, = : clitic boundary in Burmese and Tiddim Chin, I: form I（verb stem）, II: form II（verb stem）, A: agent-like argument of canonical transitive verb, A: verb stem A in Daai Chin, AC: Asho Chin, AGR: agreement, ALL: allative, AN: adnominal, APPL: applicative, B: verb stem B in Daai Chin, C: consonant, CF: classifier, CNJ: conjunction, COM: comitative, COP: copula, DEIC:（discourse）deictic particle, DEM: demonstrative, EP: epenthetic morpheme, ERG: ergative, HL: Hakha Lai（VanBik 2009）, HON: honorific, HS: hearsay, IMP: imperative, INV: inverse marker, IO: indirect object, IRR: irrealis, LOC: locative, MID: middle voice, NON.FUT: non-future, NSIT: new situation（Jenny & San San Hnin Tun 2016: 377–380）, O: object or patient-like argument of canonical transitive verb, OBJ: objective case, P: ‘undergoer’ of transitive clause, PERF: perfect, PKC: Proto-Kuki-Chin（VanBik 2009）, PL: plural, PN: proper noun, POSS: possessive, PR: pragmatic marker, PRON: pronominal, Q: question marker, REAL: realis, RELINQ: realinquitive, S: single argument of canonical intransitive verb / subject, SBJ: subject, SG: singular, T: tone, TOP: topic, TRZ: transitivizer, V: vowel / verb.

謝辞

本研究の遂行にあたり，調査にご協力いただき，貴重なアショー・チン語データを提供してくださったSKH氏に深く感謝申し上げる。同氏のご尽力なくして，本研究の成果を得ることは

できなかった。なお，記述内容に誤りや不備がある場合，その責任はすべて筆者にある。本研究に関する言語調査は，JSPS科研費（17K13442，20H01256，21K00480）の助成を受けて実施されたものである。

参考文献

Chhangte, Lalnunthangi（1993）Mizo Syntax. Ph.D. Dissertation, University of Oregon.

Condict, E. Carroll（1952）Preface. *Ashö Southern Chin Primer.* Rangoon: Baptist Board of Publications.

Davis, Tyler（2017）*Verb stem alternation in Sizang Chin narrative discourse.* M.A. thesis, Payap University.

Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald（eds.）（2000）*Changing Valency: Case Studies in Transitivity.* Cambridge: Cambridge University Press.

Eberhard, David M., Gary F.Simons, and Charles D. Fennig（eds.）（2022）*Ethnologue: Languages of Asia.* Twenty-Fifth Edition. Dallas: SIL International.

Fryer, G. E.（1875）On the Khyeng people of the Sandoway District, Arakan. *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 44: 39–82.

Grierson, George A.（1904）Shö or Khyang. In: George A. Grierson（ed.）, *Tibeto-Burman Family: Specimens of the Kuki-Chin and Burma Groups. (Linguistic Survey of India, III(III).)*, 331–346. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.

Henderson, Eugénie J. A.（1965）*Tiddim Chin: A Descriptive Analysis of Two Texts*.（London Oriental Series, 15.）London: Oxford University Press.

Hillard, Edward J.（1974）Some aspects of Chin verb morphology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 1（1）: 178–185.

本行沙織（2014）「現代ビルマ語の継続を表すアスペクト形式の研究」博士論文，大阪大学.

Houghton, Bernard（1892）*Essay on the language of the Southern Chins and its affinities*. Rangoon: Superintendent, Government Printing.

――（1895）Southern Chin vocabulary（Minbu District）. *Journal of the Royal Asiatic Society* 27（4）: 727–737.

Jenny, Mathias and San San Hnin Tun（2016）*Burmese: A Comprehensive Grammar.* London & New York: Routledge.

Joorman, H.（1906）*Chin grammar.* Rangoon: American Baptist Mission Press.

加藤昌彦（2019）『ニューエクスプレスプラス ビルマ語（CD付）』東京：白水社.

古賀裕章（2015）「ヴォイス（態）」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』

17–18. 東京: 三省堂.

西田龍雄（1989）「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　世界言語編（中）』2: 995–1008. 東京：三省堂.

大野徹（2000）『ビルマ（ミャンマー）語辞典』東京：大学書林.

Okell, John（1969）*A Reference Grammar of Colloquial Burmese*（two volumes）. London: Oxford University Press.

大塚行誠（2014）「アショー・チン語における inverse marker *mă-*」『東京大学言語学論集（TULIP）』35: 263–276.

Otsuka, Kosei（2015）Person marking system in Asho Chin. In: Linda Konnerth, Stephen Morey, Priyankoo Sarmah and Amos Teo（eds.）North East Indian Linguistics 7: 125–137.

——（2023）Linguistic similarities between Asho Chin and Burmese. In: Alexander R. Coupe, Randy J. LaPolla and Hideo Sawada（eds.）*Asian Languages and Linguistics* 4（2）: 136–166.

大塚行誠（2024）「ティディム・チン語の適用構文」『人文学林』1: 43–63.

Peterson, David A.（1998）The morphosyntax of transitivization in Lai（Haka Chin）. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21（1）: 87–153.

——（2007）*Applicative constructions.* Oxford: Oxford University Press.

——（2017a）Hakha Lai. In: Graham Thurgood and LaPolla, Randy J.（eds.）, *The Sino-Tibetan Languages*, 258–276. 2nd edition. London & New York: Routledge.

——（2017b）On Kuki-Chin subgrouping. In: Picus Sizhi Ding and Jamin Pelkey（eds.）*Sociohistorical Linguistics in Southeast Asia: New Horizons for Tibeto-Burman Studies in honor of David Bradley*, 189–209. Leiden: Brill.

Shibatani, Masayoshi（1996）Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson（eds.）*Grammatical Constructions: Their form and meaning*, 157–194. Oxford: Clarendon Press.

So-Hartmann, Helga（2009）. *A descriptive grammar of Daai Chin.*（STEDT Monograph Series #7）. Berkeley: University of California.

Stern, Theodore（1962）Language Contact between Related Languages: Burmese Influences Upon Plains Chin. *Anthropological Linguistics* 4（4）: 1–28.

Tignor, Daniel（2018）A Phonology of Hill（Kone-Tu）Asho. Master's thesis, University of North Dakota.

VanBik, Kenneth（2009）*Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages.*（STEDT Monograph Series #8）. Berkeley: University of California.